

【親鸞部門・中外日報社賞】

頼る勇氣

大谷高等学校 第3学年 福田 美月

私にとっての宝ものは、人を頼る勇氣です。

私は、人に何かを頼んだり助けを求めたりするということに苦手だったので、共同作業が嫌いでした。同じ目的のために集まった仲間に、行き詰まった時や手一杯な時に頼るのはごく自然なことです。しかし、頼った相手が仕上げてくれたものが理想の完成形と違って、せっかく助けてもらったのに心から感謝できないということを何度か経験するうちに、人に頼ることが怖くなりました。「やり直すことになるくらいなら、最初から自分でやれば良かった」と思ってしまう自分が傲慢で腹立たしく、頼った相手にこんな内心であることを申し訳なく思いました。だから、共同作業でリーダーになると仕事を自分に集中させて、自分で振り分けた仕事は自分でやらなければならない、と考えることで、人に頼ることを避けるようになりました。

しかし、中学生の頃にグループワークで一緒になった同級生の言葉で私の考えは変わりました。

グループでの作業が大詰めとなった頃、手空きになったらしい彼女が仕事は無いかと聞いてくれました。私は感謝しつつ、その申し出を断りましたが、彼女はこう言いました。

「頼ってくれたほうが嬉しいから、遠慮しないでいいって。ダメなところあったら言ってくれば直すし。」

そうして半ば勝手に、いくつかの資料の作成を請け負ってくれた彼女の言葉を反芻するうちに、私は気がついたのです。私が人に頼ることを苦手としていたのは、頼った人が仕上げてくれたものを訂正する勇氣も、人を信用する勇氣も無かったことが理由だったのだということに。

その時からは、自分がやればいい、という傲慢な考えは捨てて、二つの勇氣をもって人の力を借りるべき時に人を頼ることを大切にしています。